

浄土

九月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受記録誌第三五二号)
昭和三十一年八月二十五日 印刷 昭和三十一年九月一日発行

第二十九卷

第九号



特輯
創価学会

法然上人鑽仰会

法然上人が現代においでになったら「選択本願念仏集」をこのようにおとくなるであろう 念仏信仰の真髓を明らかにした全浄土宗徒必読の書

選 擇 集 私 解

大正大学教授 文博 竹中信常 著

新書版 送料 一 二 〇 〇 頁
定価 一 二 〇 〇 円
送料 三 〇 〇 円

目 次

- 宗祖と共に
- やさうけき旅路
- 念仏にすけさぬ
- 特急「ごくらく」号
- 砂糖と塩
- いつでもどこでも
- ふり仰ぐ山の高さ
- 浄土への道
- 借金と念仏
- サシミ念仏
- 一に一たす二
- 偏依法然
- あとがき

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大 道 社

教 育 奈 良 の 大 仏 さ ま

監修／東大寺教学部
指導／清水公照・堀池春峰
画／井上与志夫
B5版・52ページ 定価 100円・〒40円

も く じ

- 東大寺と大仏さま
- 天平のころ
- 大仏さま造立
- 大仏殿建立
- 開眼大供養
- がんじんさまと戒壇院
- 奈良もえる
- 重源上人の再建
- ふたたびご難
- 元祿時代の再建
- 大仏さまの法要
- たのしい拝観
- おとうさん・おかあさんへの参考

■絵で見る天平の文化 ■小・中学生の日本史の参考となる本 ■大人も子供は一度は見るべき本

発行所

大 道 社

千代田区飯田町一ノ二二

浄土

九月号



阿弥陀仏は悪業の衆生をすくは
んために、生死の大海に弘誓の
ふねをうかべ給える也。たとえ
ばおもき石、かろきあさがらを
ひとつふねにいでて、むかいの
きしにとどくがごとし。本願の
殊勝なることはいかなる衆生も、
ただ名号をとふるほかは、別
の事なき也。(法然上人御法語)

目次

表紙 木像上人の地蔵菩薩

- ◇ 彼岸ということ…………… 藤吉慈海… (2)
- 特集 創価学会
- ◇ 日本国みな法然の弟子…………… 竹中信常… (6)
- ◇ ありのままの宗教—寺折伏を受ける… 渋谷賢応… (10)
- ◇ 学会手引—相手を知ろう (学会出版物) …… (14)
-
- 紀行文 パータリの木陰にて…………… 佐藤良純… (18)
- 童話 赤い三輪車…………… (19)
- 近代 高僧伝 一祥道琳瑞…………… 大橋俊雄… (22)
- 紹介 高橋良和著 分裂十五年…………… (13)
- 御法語をいただく… (17) 浄土の動き …… (32)
- 一枚起請文講話 (Ⅱ)
- 聖道は有り得るか…………… 村瀬秀雄… (24)

彼岸ということ

藤 吉 慈 海

(京都市大学人文科学研究所員)



暑い暑いと思っていたが、今年もまた秋の彼岸をむかえることとなった。春のお彼岸には、知恩院の上にある捨世派の本山一心院へお話に行った。何のお話をしたか忘れてしまったが、須賀隆賢先生にお目にかかり、いろいろお話をしてから、広い大方丈で四、五〇名の参詣の方々に、彼岸の意味について大体次のような感想を述べたように思う。

それは先ず昼と夜、月のみちかけ、四季の推移等にみられる日月星辰、自然の運行の周期性に対する人間の自覚からいろいろの哲学や人生観が生まれたこと、そして春秋の彼岸に、先祖のお墓に詣り、お寺に集ってお話を聴くとい

うようなことによって、人間の一生というものを反省してみることの尊さを強調した。昨日も友人の福永光司君が莊子の哲学について話していたが、莊子の齊物論にみられる思想は、要するに万物は皆齊しいのだという人生哲学である。彼のような中堅有為の学者でも、いろいろ煩惱のとりことなつて、むしろくしゃする時は黒谷の墓地を散歩するそうである。すると、何とかかと言つても、人間はみな一様に死んでしまふではないか、死んでしまえば皆このようない冷い墓標にやつてしまふんだと思うと、自分の煩惱も消えうせ、莊子の哲学もなるほどとうなずけるといふのである。齊物論の哲学をそのように理解することが正當かど

うかは別としても、如何にも福永君らしい、莊子の理解のしかただと思つて感心した。莊子の思想などむずかしくて、つかみにくいものだが、莊子をあの様に理解して人生を中国哲學風にせい一杯に生きようとする彼の求道者の態度に私は非常に感動した。仏教ならずとも、中国哲學によつて人生を生きぬこうとしている人もいるのだなと思つて、中国人の智慧の深さに今更ながら驚いた次第である。

仏教はそのような高度な文化を持った中国に入つて中国の文化に大きな影響を与えもしたが、同時にまた、仏教そのものが中国思想によつて変形されたように思われる。中国の禪などは老莊思想の影響によつてインドのヨーガ等とはよほど異つたものとして發展したように思われる。

淨土教にしても、中国人は、はじめ彼岸ということを知らなかつたのではないか。もちろん中国人も靈山や東海の島には仙人の住む不老長寿の国があると信じていたようだが、そのような他界觀念が、仏教の輸入、とくに淨土教の移植によつて、極楽淨土というすばらしい彼岸の世界のあることを知らされたのであつた。そこには無量寿仏という仏がましまして今現に説法していられるというのだから、その淨土へ生まれたいと願う者も自然多くなつたにちがいない。それにしても元來現實的な中国人は、そのような淨

土へ未來に生まれるということになお満足し得なかつたようである。やはり現世における解脱こそが尊いと考える者もいたのではないか。曇鸞などというような人も、はじめは老莊思想に親しんでいたようであるが、後に淨土教に歸した人である。廬山の慧遠にしても同様であるが、二人ともその思想の根底に老莊哲學的なものがあるように思う。三ツ子の魂百までというが、淨土教に歸しながらも、素朴に未來の淨土を願生した人々ではないようである。二人とも彼岸の世界をどこかで此岸的に生きようとする人々であつた。彼岸の救を此岸において悟として味つた人であつたように思われる。そこに中国の淨土教者の一面があるのではあるまいか。

道綽さまや善導さまになると幾分ちがつていようであるが、それでも注意してみると彼岸の世界を此岸からいろいろに思慕しながら、やはり此岸において彼岸性を生きる人々であつたように思う。決してただ未來の彼岸をあこがれる單なる未來主義者ではなかつたことは、そののこされた書籍の中に了々として明らかであるところである。

まあおきが少し長くなりすぎたようだ。

「彼岸ということ」に話を戻すことにしよう。彼岸とは梵

語のパーラという語の訳語であるが、パーラとは彼岸とか対岸とかものの終りとか、終着点とか究極地というような意味の語である。要するに此岸に対する語であって、此岸が現実の世界であるとするならば、彼岸とは理想の世界である。此岸は穢れたところであるに對し彼岸は清浄なところであるから、穢に對し浄土と言われるわけである。人間がただ現実の世界にのみ目を向けて彼岸の世界のあることに気づかないこと位情けないことはない。われわれはお互に泥の凡夫にすぎないが、少くしも清らかな生活をしたいと願うところに人間としての尊さがあるのではあるまいか。

此岸において彼岸を生きたとはそのようなことである。彼岸をあこがれるのも、われわれが此岸のみにくさにおどろき、嫌気がさすからのことである。此岸のすきな人に彼岸はあり得ない。人間はどうかすると地獄のような世界であっても此岸が好きな動物なのである。欣求浄土という気持は現代人には殊にすくないようだ。戦国時代ならいざ知らず、逆馬に乗って西の方を向いて関東へ下って行ったような馬鹿正直な荒武者は、今日ではみかけられぬ。西方に浄土があるといくら言っても、それをききながら、心の中に西方をうけとめている現代の念仏者である。それであっていいのだ。それならばこそ、自分の家の阿弥陀様が西を向

いていられようと、南を向いていられようと、又それに向って合掌している自分が北を向いて拝んでいようと、一向に気にかからないのである。阿弥陀堂は西方にあって、御本尊は東を向いていなければならぬという要求は今日の人間には不必要であろう。そこまで人間が方角や形式的なことに執われなくなったと見ることができよう。それは人類の進歩である。宗教の進化であると言ってもよいと思う。より進んだ形の宗教にわれわれは目を開いて行くことを忘れてはならぬであろう。いつまでも形式的なことに拘泥するのはバ乗仏教者のとるべき立場ではないであろう。

新しい浄土教は、もう一度浄土經典そのものの味読にまで立ちかえる必要がありはせぬか。そこから新しく出なおす必要があるように思われる。祖師にかえれという言葉も耳にするが、さらに進一歩して祖師を越え、經典そのものを見る眼を養わねばならぬであろう。禪家では、「看經の眼を具す」とよく言うが、われわれは經典の出どころをつきとめる必要がある。出どころといっても、浄土經典がインドでできたか西域でできたかというような今日の仏教学者の愚にもつかない論議のことではないのである。もっと大切なことは、經典の作者、經典の能表現者の立場をつき

とめるということである。その立場に立って見ないと經典というものが完全に根本からわからぬからである。一度その立場に立つと、經典の根幹がよくわかり、跋扈なことはわからずとも、その大局を見失うことはない。それが一番大切なことである。經典作者の立場に立って經典を内からよみやぶってみることである。そうすると經典そのものの不備なる点もまた自ら自覚されるであろう。浄土教者は今日まで、あまりにも聖教量を尊びすぎて、そのような批判的立場に立つことを忘れてはいなかったか。本当に聖教を尊ぶとは、その聖教の根底をつきとめることでなければならぬまい。わからないからありがたいのではなくして、「聖意はかりがたし」と宗祖のいわれたところをよく考えてみることである。それを後学がやらなかったために、白隠をして「法然上人の如き、道德・仁義・精進・勇猛、暗中に聖教を披覽し玉ふに眼の光を用ひ玉ひける程なれば、少し疑団だに在したらんには立地に大事了畢し、往生決定し玉ふべきものを豈索短くして浮泉を汲まざるなど悲嘆し玉ふに及ばんや」等と批判せしめずにすんだであろう。白隠の法然理解はまだよく至っていないが、白隠に影響を与えた

と私はにらんでいる鈴木正三等はよりよく法然上人を理解している。「法然上人の念仏など、吾らぬ悟りなり」と言

いきっているところ、白隠以上の見識ではないか。正三人は禪と念仏とを双修した人であつただけに、浄土門でも禪でも、あまり重視されていない人であるが、彼岸を此岸において生きぬいた人として、極めて近代的仏教者であつたと言ふべきである。

田辺元先生が新しい宗教の形として、墮落した中国の念仏禪ならざる新しい念仏禪の出現を希求していられたが、私も此岸において彼岸的な生き方をするためには、従来の浄土教の即自性を脱して一度禪に媒介される必要があると思う。

そして禪の持つ即自性も洗い浄められて、禪と念仏とが否定的に媒介し合った新しい念仏禪が提唱されねばならぬと思うのである。それが、日本における最も近代的な宗教のあり方ではないかと思うのであるが、そのことについては又、あらためてお話ししてみたいと思う。

「彼岸ということ」という話がとんでもないところへ流れていったが、これも又、此岸において彼岸を求める者の一つの意見としてきいて頂けるのではないかと思う。



日本国みな法然の弟子

竹 中 信 常

文博・大正大学教授

わたしの学生時代に、大正大学に今岡達音という老教授がいて、宗学を教えていた。外道の学問に引かれていたわたしには、宗乗などおおよそ面白くない学科だったが、単位の関係でどうしても受けねばならなかった。ところが今岡教授の時間だけは面白かった。むろん講義の内容はチンプンカンプンだったが、今岡教授の講義の仕方に興味をひかれた。講義を始める時と終わった時とのほかはうしろむきなのである。黒板にむかって白墨で書いたり消したりして、少しも学生の方をみない。まるで、自分一人が黒板と対決しているみたいであり、また事実そのように熱がこもっていた。とくに日蓮教学の批判など痛烈きわまるもので、文字どおり口角泡をとばして、興奮のあまり日蓮聖人のことを、

「日蓮坊主は……」

などといったりした。わたしはこの情景をはるか時の隔った今日でもアリアリと思ひ浮べることが出来る。——そして思うには、「今岡教授今日ありせば」ということである。

創価学会について全日仏の依頼で若干書いたが、その時もツクツク思った。宗門としてハッキリと創価学会対策なり、それとの対決を試みている多くの既成教団の中で、一番鋭く、かつ執ような攻撃をうけている浄土宗だけが、いまだ創

価学会乃至日蓮正宗に対する反駁を試みてないのは一体どうしたことだろう。今岡教授の霊はさぞかし地団駄ふんでくやしがつているにちがいない。

大法輪誌上のアミダ信仰論議にしても、宗門の学人は何を考えているのだろうか。

そんなことを思っているところへ、編集部から原稿依頼があったので、近來の創価学会についての感じをいささか述べることにしたのである。

二

正直にいうと、創価学会に対する批判はもはやわれわれの手にあまるものである。われわれとはいわば宗門人であり、既成教団に属するものという意味である。なぜなら、既成対新興という形で、相対的にこれをとらえることにはそれ自体「限界」があるからである。昔からよくいわれているように「法論はどちらが負けても釈迦の恥」

である。論破しつくしたといっても、お互いに「仏教」だという残りカスがこののである。しかも、在来試みられて来た批判の根底をなすものは、相手の教義の解釈であって、いわば理論闘争である。しかもその材料となるものは外側から集められた經典とか論書とかの「文書」であって、一番肝心のものは「門外不出」とか「他見無用」とばかり称して出さ

ない。「靴をへだててかく」というもどかしさが感じられるのである。

日蓮宗務院で出したものも、真宗教学研究所で出したものも、曹洞宗で再度にわたって出版したものも、すべて肝心のキメ手となるとボケてしまつて何ともいたしかたがない。それというのも、結局は教義学上の「理論闘争」に終始しているからである。

既成教団側の批判が教義学的理論闘争の形でおこなわれて来たのに対して、社会科学者——たとえば佐木・小口・高木・重松・松島——などの批判は、これを戦後日本にあらわれた異常な社会事象としてとらえ、こうしたものがはやるのは、日本の大衆がそれだけ卑俗だからとか、封建性・帝国主義が形をかえてあらわれたものだからとか、既成教団が墮落しているからだとかといった。外部的な条件にその原因を求めようとしている。つまり、創価学会の出現とその発展を社会的必然としてとらえ、これを社会学乃至社会史学の理論にあてはめて分析しているのである。

こうした批判の仕方には「宗教」とか「信仰」とかといった精神的な要素がぬけている。したがって正しい意味での宗教批判とはいえない。ただ、このようにして創価学会は巨大になったということの説明に終っている。

以上でわかるように、現在に至っては、創価学会を外がわから眺めたり、一つの出来事として説明しただけでは本当のことはわからなくなってしまう。そこで、その限界をぶちやぶるには、外側からでなく、内側から、ただ単なる出来事としてではなく、どうしてあのようなものが出来たかという遠い因由から深くさぐることが必要になって来た。そのうちの、うち側からの批判を試みたもののトップが高瀬広居の「第三文明の宗教」であった。この方法には相手のフトコロにとび込み、相手の持っているものを利用するのだから、いままでにない斬新さがみられるが、しかし、それと同時にそこには警戒すべき危険をともなう。つまり「ミイラとりがミイラになる」危険であり、「第三文明の宗教」は著者の意見はとに角として、多分にミイラ的なところがみられる。この点、若干の資料を提供したわたしとして残念であった。

これとやらんで急ピッチにおこなわれたのは、ジャーナリズムが社会評論家を動員してインタビュー形式、あるいは学芸資料による批判であった。中央公論、文芸朝日、産経ノン・イクシオンなどで試みたものである。そしてこのような試みがなされるようになったこと自体、先にも述べたように、創価学会批判はすでにわれわれの手をはなれてしまったこと

を示しているのである。つまり、創価学会はすでに宗教団体、信仰集団としてのワクを越えて、日本の社会の底流を大きく左右し、日本の政治動向にもある程度の影響力を持つ、いまだはっきりと性格づけることの出来ない、巨大な団体にまでのし上って来たのである。

三

われわれに残された一つの道、そして、これこそが本来たどられるべき正当の道であったのに、いたずらに理論闘争や現象分析にのみふけていた——その道がいまわたくしたちの前に横たわっている。

その道とは「実践的対決」である。

創価学会では、何かというところに「勝負でゆこう」という。つまり信仰的実践を強調するのである。彼等のいう法論とは、こうした信仰をウラづけとしているのである。だからマトモに理窟でぶつかっていても全然マトモはずれの水掛け論に終わってしまう。そして「現証」といって、現世利益をふりまわして逆襲して来る。

こうした戦法に対しては、先方の闘争ペースにまきこまれてしまつては、それこそ「小樽問答」の二の舞におわつてしまう。むしろ先方が題目で来るのなら、堂々と「念仏」をもって対抗すべきである。選時抄のなかで日蓮をして、

「日本国みな一同に法然房の弟子と見えけり。この五十余年が間、一天四海一人もなく法然の弟子となる」

と驚嘆せしめた「念仏」の威力をもって、彼等のいう「現証」を破碎していくべきであらう。いうまでもなく、宗教の本質は「信ずること」である。そして信ずることは同時に「おこなう」ことである。つまり信仰実践である。創価学会に、もしみならうべき長所があるとするならば、全会員に徹底した

「唱題目」を実践させていることであらう。とくに末端の会員をかたくつなぎとめている鉄の鎖は、この「題目を唱えよ」という一事である。創価学会の会員に出来て、浄土宗の信徒に出来ないという法はないのである。浄土宗の僧侶自身が専修念仏を実践すれば、信徒は必ずずついて来る。第二代会長戸田城聖は獄中にあって一日一万遍以上の題目をとなえたとする。現在の学会幹部も、折伏指導に奔走して疲れて真夜中に帰っても、必ず数百遍の題目をかかさぬという。このことは理窟なしにみとめなければならぬと思う。も早や理論で片づく段階ではなく、それを残して、お互いに信ずるところを実践する段階に来ている。非常に常識的ではあるが、それだけに無理であるところの「不言実行」の四文字こそ、今、一番必要なことである。信仰批判とは、まずやってみることである。念仏を唱えることである。念仏を唱えなければ、

他人に唱えさせる力は湧いてこない。金浄土宗の僧侶が日に一万遍の念仏をそれぞれ唱えさえすれば、そのほかのことは何をしなくともよい。わたしはそう信ずる。そして、これこそが、われわれにのこされた、たった一つの創価学会対策なのである。

（追記）この稿を書き終って編集部に届けようとしたら、七月二十七日附の各新聞に、大正大学カヌー部員水死の報が三面に大きく出ていた。これがこんなに大きく報ぜられたのは、その部員が「泳げない」からであった。水泳の出来ないカヌー部員なんて考えてもみないことであり、それを平気で入部させた当事者の無責任さもあきれるばかりである。亡くなった学生には甚深の哀悼をささげる。

——しかし、わざわざこのことを追記したゆえんは、「泳げないカヌー部員のおろかさ」が形をかえて、われわれの間に多くみられるからである。それは「念仏をとなえぬ浄土宗僧侶」ということである。だが泳ぎを知らずに、ひっくりかえりやすいカヌーにのることのおろかさは、念仏を唱えることをせずに浄土宗の坊さんになっていることのおろかさよりはまだマシかもしれぬ。なぜなら、水におぼれるのは自分だけだが、念仏を忘れることは浄土宗徒全部にめいわくが及ぶからである。

ありのままの宗教 (10)

寺折伏を受ける

渋谷 賢 応

(諏訪仏教会副理事長)

私は去る一月三十日の夕刻、創価学会の青年部の人たちによる寺折伏を受けた。

事の起りはこうである。

私の檀家に河西長五郎さんと言う篤信のおちいさんがいる。もう八十近いと思うが男の子が

なく、娘さんに養子、初吉さんを迎えたが、年よりと若い者の間が思わしくなかった。そのうちに、初吉さんの実家の兄が創価学会に入り、初吉さんを折伏した。長五郎さんは反対したのだが、初吉さんは私の所に離檀状を、長五郎さんの名前で書いてよこした。そこで私は、初吉さんとはかく、長五郎さんの真意がくみとれず、一度私の所に来て下さいと長五郎さんあてに手紙を書いたが、来たのは長五郎さんではな

くて初吉さんであった。

「信教は自由だから日蓮正宗に入信なさってもやむを得ないが、おちいさんはじめ家中納得の事なのでね。」

「そうです、おちいさんも入信いたしました。」

「そうですか、では離檀の証換にあなたの家の御先祖さまの過去帳を抹殺させていただきます。よろしいですね。」

「はい。やむを得ません。」

そう言うやりとりの結果、初吉さんは帰った。

しばらくして、長五郎さんのつれあいのおばあさんが亡くなった。隣組が葬儀のつげに来たので離檀状を見せ、

「この手紙のある以上、私はうかがうことはできません。これを返しますからお受取り下さい。なお、今後、離檀する

ことのなきことをお約束願えれば上りましょう。」

「そのように申し伝えます。」

間もなく電話で、よろしく頼むと云うのでおうかがいし、葬儀を無事にすませた。

後でうかがうと、おちいさんは全然知らなかったのだそうで、親戚中が初吉さんを、文書擬造と言う事でせめて大変であつたそうである。

ほどなく電話で初吉さんより、又日蓮正宗に入信する旨通知を受けた。私は心外に思ひおちいさんの真意を質すと、

「私は戸主です。だれの采配も受けません。」

「まあ一度寺へ来なさい。こんな大切なことを電話や手紙一本では失礼です。」

「そうですか、では又。」

こんな事で一月三十日、いよいよ地方選挙が始まろうとしている時分に出かけて来たのである。

「来いと言うから来ました。私は誰が何と言っても正宗に入信致します。」

「そうですか、信教は自由だと言うからそれもやむを得ません。しかし私は、日蓮正宗特に創価学会と言うのは、きわめて信心強盛な宗教だと聞いているが、あなたは何と言う薄弱な信仰をもっているのですか。浄土宗、正宗、おばあさん

がなくなつて浄土宗、それがすぎれば、その時の約束をふみにじつて又日蓮正宗、まったくあきればた人ですね。」

そう言い終るや、暗やみの中からどやどやと五人の男があらわれた。

「先生、私たちは学会の青年部のものです。今晚は先生にしっかりと宗論をお願いするつもりでまいりました。」
と言うのである。

「私は今、初吉さんと話をして居るのです。しかしあなた方がそのように言うならば、一つ私からうかがいましょう。

あなた方は今、どこを訪ねられたのですか。」

「心光寺と言う寺です。」

「心光寺は何宗かご存知ですか。」

「浄土宗だと聞いて来ました。」

「そうです、浄土宗です。私の寺を訪ねて下さる人は、どんな人でも御本堂に上つていただいて、本尊様の前でお念仏をしていただいて、それから用件を承る事になっています。あなた方が浄土宗の心光寺にお参りして下さった以上、このしきたりに従つて下さらなければ、私としてはあなた方と宗論することはできません。」

「どうしてもそれをしなければならぬのですか。私たちは宗論に來たのです。」

「宗論はどちら負けても釈迦の恥」と言う歌を知っていますか。信仰は理屈ではありません。行です。明日の朝までつき合ってくれとは申しません。三時間や五時間のお念仏ができないような人と宗論するわけにはまいりません。どうですか。」

「よし、上れ上れ。」

「しばらくお待ち下さい。私、衣を着てまいります。」

そこで本堂に入りお燈りとお線香のみにて照明をつかず、まっ暗い御堂で伏せ鉦を打ちながら念仏をはじめた。

学会の人々はどやどやと入って来たが、私をとりまいて立ったなり、

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、一
と気がいのようにお題目をとなえるばかりでお念仏一つしない。

信濃の諏訪の寒中の広い本堂の中である。まっ暗の中にお燈明のみが明るく、本尊様を照し出している。猛烈な寒さである。

と私の耳もとで一人が叫んだ。

「こんなことをいつまでやっているんですか。」

又一人が、

「念仏すると無間地獄ですよ。」

それでもこちらは修行中とて、お念仏をつづけていると、

「こんな者は話にならん。あっちへいってやれ。」

六人はどやどやと本尊さまをとりまいて、題目をとなえることしきり。

手をかけたら承知しないと念仏していると集ってひそひそと何か言っていたが、又どやどやと本堂を引き上げていった。その間十分。

あとで家内に聞いたら、

「寒くてしかたがない。奥さんちょっとあたらせて下さい。」

と言って炬燵にあたたり、

「奥さん、今夜は先生は念仏ばかりして話になりません。又出なおります。」

と言って出ていったそうである。それから彼等は、又、一里半もある山中の寺へ行ったそうである。そして、

「心光寺の坊主は太い坊主だ、ひどい目に会った。」と言ったそうである。私は太くも細くもない。中肉中背である。

逆折伏を行ったつもりもない。ただ元祖法然上人の「たとひ一代の法をよくよく学すとも、云々、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。」のおことばをそのまま受け取っているまでである。

浄土宗が分裂して合同するまでの十五年間、それは誠に厳しく、けわしい年月であった。「覆水盆にかえらず」というのが、宗団分裂の常であるとされることよりすれば、今回の合同は、まさに史上稀なものと言うべきである。本書は、この稀な合同への過程を、こまめなメモを基礎にして、記者的視点で書きつづった不朽の歴史の一コマである。

高橋良和氏は、三十年近く、中外と共に生きて来た人であり、今は大黒柱である。氏の専門は寧ろ、幼児教育であるが、記者としての生活も長く、そして深い。こと宗教の動きについて彼の出てこない場所はないこの分裂十五年が、そうした客観的な記者的視点に立って綴られたものであることは、勿論である。しかしながら、彼も浄土の一僧侶であってみれば、その分裂の実態を知れば知る程、合同への希求は強かったに違いない。あとがきに、「分裂したその日から、わたしはただひたむ

きに合同一本化のあることを祈っていた」と述懐しているのは、氏のいつわりのない心情であろう。そして、氏は中外日報を通じて、確かにその役割りの一端を果たしたと言っても、決して過言でないであろう。

本書は、その過程の中で彼が見、或は考えた事を、百八回にわたって中外に発表したものの集録である。こうしてまとってみる

高橋良和著

分裂十五年

と、又一段と分裂から合同への動きが手に取る様で、これに関心を持つ者は、大いに心動くに違いない。

しかしながら、この分裂は、松本徳明氏がその序文でも、言っている如く宗教本来の立場に立った分裂ではなしに、「馬鹿げた悲劇」の一面を持っていた。そして、そのこと

は、この書を一読するものの痛感するところに違いない。何故にもっと善意な合同への努力と結実が、早くなされなかったかと悔いられてならない。

兎も角、合同はできたのである。過去のことは過去として、われわれは、この合同を喜び、禍を転じて福と為すべく、努力せねばならない。本当の仕事はこれからである。

本書はその記録の刻明さにもかかわらず、何か物足りなさを感じるのは、宗教界、社会との継がりが見捨てられている為であろう。しかし、この分裂さわぎそのものが、コップの中の嵐であってみれば、或はこれでよいのかも知れない。いろいろな意味でこの書は、われわれに多くの問題をなげかけてくれる。反省の為に、前進の為に、一読して見る必要がある本である。江湖のひとびとに大いに推せんしたいわけは、こうしたことにある。

中外日報社発行 ¥ 三五〇

相手を知らう

——学会出版物——

学会旋風は、今や日本全土を吹きまくっている。恐ろしい怪物のはく火が、われわれの足もとを焼きつつある。いつなるとき、この火がわれわれを焼きつくすかも知れない。

しかしわれわれは、いたずらに恐れてはいけぬ。冷静に相手の何たるかを認知して、これに対処してゆかなければならない。

ともすると、何これ位かという安易さや、徒らに恐れるあせりばかりで、相手を静かに見つめる努力が足りないのではないか。相手を知ることが、相手に対処する最良の道であることを知るべきである。

編輯部では、この意味において、竹中博士の論文を出発点として、しばらく学会紹介と、これへの対策をつづけることとしたい。

創価学会からは、いろいろな出版物が出されている。学会や、日蓮正宗を紹介する諸種の本や、解説書、会長の講演集などの外に、新聞、雑誌もいろいろと出されている。これらはすべて学会を知るのに必要なものであるが、学会を専門的に研究する以外は、その総てを読む必要はない。今ここでは、学会とはどんなものか、又日蓮正宗と如何なる関係にあるかを、簡単に知り得る資料として、二、三の書物を紹介してみたい。

この外に、学会以外の出版物（紹介書、批判書、研究書など）いろいろあるが、いずれも、夫々の立場があるため、一方にかたより勝ちである。われわれとしては、先ず直接に相手のものを手にして、自からの目でこれを確かめることが必要であらう。

折伏教典——戸田城聖監修

何と言っても、学会と言えば「折伏」という言葉がでてくるほど、折伏は学会のエネルギーであり、更には、学会のすべてである。折伏のない所に学会はない。逆に言えば、全部折伏してしまうとき、学会はその活動能力を失い、自滅すると言ってもよい程である。そんな矛盾もはらんでいるのであるが、その折伏の源泉となり、教科書となっているのが、この折伏経典である。

この本は、前会長の戸田城聖の監修で、学会の教学部が編纂したもので、昭和二十六年十一月に最初のものが出されている。昭和二十六年の頃と言えば、戸田が青年部を結成し、大折伏行進を宣言した年である。この年から学会は急激に発展した。そして、その折伏は、常にこの経典を支えとしている。

「内には日蓮正宗の衰微を見、外には邪宗の本尊横行して大聖人御子言通り日本国滅亡の時に遭い、……」

と戸田は序文に書き、邪宗撲滅の為に行進すべしと叱咤した。邪宗とは、いうまでもなく日蓮正宗以外の一切の宗教を指しているので

ある。この本はその後、現池田会長のもとで改訂されているが、先ず総論で日蓮正宗の歴史と教義を略述し、各論に入って、如何に折伏するかを、いろいろな場合に応じて説明している。

第一章 信仰に無関心な者に

第二章 信仰に反対の者に

第三章 他の信仰に関心を持つ者に

第四章 求めている者に

第五章 正宗の信者に

第六章 外道及び民間信仰の実態

以上が、その主なものである。自分の宗教のみが最高最善で他は邪教だとすることは、随分勝手なことであるが、これを徹底する度胸は大変なものである。同じ様な調子で、われわれは、われわれの信仰を強調したいものである。その為にも、一読参考にするべきである。逆折伏も、簡単にできよう。

特にこの本では、各宗批判（既成仏教、神道、キリスト教、新興諸宗教）を徹底的に批判し、邪教と決めつけるところを、よく読む必要がある。確かにある勘所を押えているが、又ある点では、馬鹿々々しいことを、義

真面目にとりあげている。そして、彼等の他宗批判による折伏は、この程度の知識で、出かけてくるのである。その程度を知っておけば、何も恐れることはない。兎角、こちらがよいかげんな知識だと、頑強な狂信者に言い負かされてしまうのである。

仏書店で簡単に入手できる。二八〇円である。

創価学会……小平芳平著

これは、参議院議員で学会の教学部長である小平芳平の書いた学会紹介書である。学会の出版とはなっていないが、勿論、これは学会PRの為に書かれた書物である。多分目にみえぬベストセラーとして、大いにもうけている本の一つに違いない。

この本は一応、真面目に、学会人として学会を紹介している点、前の折伏経典のように無茶苦茶な邪教呼ばわりはない。しかし、少くも日蓮教学や、その宗教的主張が如何に独善的であるかは、今更

ここでいうまでもない。第二章の中、特に第二節に、「利益と罰について」というのがあるが、これが学会独特の現世利益論である。そして、この論が、多くの学会信者を引きつけているのである。学会を信仰すれば、どんな難病でもなおるといふ。日蓮が言ったから間違いないとする。しかし、おまんたらを拜んだら、「どうして功德があるかという理由は、理論ではわかりません」と言い、兎も角



信じてみるという。こうした利益論の是非を、一つしっかりこの本で考えてみる必要がある。

信仰した人は強いと言いますが、全く驚くほどで、どうしてこんな事を、こんなにまで信じているのかと、不思議な程です。しかし、この本は、彼等がそうした世界に引き込まれて行く過程を、それとなく知らせてくれます。

この本には、不思議なことに、多くの知名人が、一筆書いたのを集めています。一言苦言を呈している人もいますが、総理大臣までが、書いているとは驚いたことです。日本とは不思議な国に見えてきます。小平が参議院議員であることに、こんなことも出来たのでしようが、そうしたことに又目のくらむ人々が多いのです。この本の知名人は、その目をくまらず為の一役を買わされているわけですから。一般の本屋でも手に入るものです。一八〇円という値も、手頃で、この頃はやりの新書版級といえます。

日蓮正宗創価学会

—東京大学法華経研究会編

この本は、東京大学と研究者の間に、国立の最高大学を置いた所に、ミソがある。内容は、前の二書と大同小異で何でも東京大学にいる学会の学生に依って書かれたものだからである。しかし跋文を書いている小口氏さえ、そうした研究会があった事を、この本が出るまで知らなかったようで、発行所になっている山喜房も、名を貸しただけの様で、その点、やはり、こうした名に目のくらむ日本人の弱点をついた出版ぶりです。

一応、仏教史を論じ、学会に及んでいる点如何にも學術書である。しかし、これを読む時も、いわゆる學術書として見ては、失敗をする。やはり学会の書として、じっくり読むことです。四八〇円で、これも簡単に手に入ります。

新聞、雑誌

聖教新聞、公明新聞、大白蓮華がその代表的なもので、聖教新聞の如きは二百三十万部近く出ている、大新聞なみになっています。

週三回で、一二〇円。学会のPR紙であると共に学会と信者を結ぶ紐でもあり、又学会の財源です。大白蓮華は月刊雑誌で、会員の毎

月の教科書です。一冊五〇円です。この雑誌をもつて、毎月の座談会や、講義集会に出掛けて行きます。そして、この本を中心に徹底的に学会の信仰が指導されます。毎月必ず、日蓮の御書がのせられ、全国の学会員が同じくその指導をうけるわけです。

この点、われわれは、もっと学ばなければならぬ点があるようです。教学を知ること、信仰を深める大きな力であるからです。

公明新聞は、公明政治連盟の出している週刊新聞で、もっぱら政治のことを書いています。今度の選挙では、この新聞が大活躍をしました。公明会と学会とは、別の組織には違いますが、同じ頭です。幹部は両方にまたがっています。二つの新聞で、政治と宗教を使いわけているのが、今の学会であると言えます。そして、学会は、今や、宗教団体から、政治団体に変貌しつつあります。何とか、それをカモフラージュしているのが、この二つの新聞と言えそうです。大白蓮華は仏書屋でも売っていますが、新聞は信者にでも見せてもらおうのがよいでしょう。

御法語をいただく(トビラの法語)

法然上人は誰に対してでも、口ぐせのようにな「ただふかく本願を信じて、お念仏を申しなさい」と繰返しお諭しになつていました。しかし誰でもなかなか純一になれません。阿弥陀さまの平等の大慈悲は、こちらが智者であろうと愚者であろうと、清浄な生活を送る者でも泥まみれの毎日を通す者でも、それによつて区別されるものでありません。このように頭の中では解つたつもりでも、実際には一体これでよいのかと迷うのも無理のないことでしょう。ある人がこう質問しました。

「心が澄んでいる時にお念仏を申ししていると、余計なことを考えることなく、ほんとに極楽の様子が頭の中に浮んでくるし、阿弥陀さまのお慈悲が有難く、我ながら心ゆくばかりのお念仏が申せます。これこそ清浄のお念仏というべきでありますよ。ところが気持が散乱している時は、身体もまた散乱します。つまり心と身体が別の方

は、お念仏を申し、手には念珠を持っていでも心の方はあらぬ事ばかり考えていることになります。これでは不浄のお念仏と申す外ありませんまい。同じくお念仏を申すにしても、この二つでは大きな違いがあると思いますが、如何でしょうか」

至極ごもっともな質問でありますし、誰でも常に経験し、その度に迷うことも事実です。しかし上人はきつこう申されました。

「このうたがいをなすは、いまだ本願のゆへをしらざるなり」

そして本願の意味を簡単に説明されたのがこの御法語であります。阿弥陀さまは智者や清浄の者を救われることは当然ですが、それにもまして数多い悪業の人々を救われようとしています。お念仏を申す者を救うというのは、この世にうごめく一般の人々の救いのためにあるのです。この広い世界に「四弘誓願」という船を浮べられています。船は重い石でも軽い乾草でも区別なく向う岸に渡してくれ

罪深いものも軽いものも、お念仏を申す人の区別を超えて彼岸に渡してくれます。不思議といえは不思議ですが、本願とはただそれだけのことです。

四弘誓願というのは、第一にできるだけ多くの衆生を救うこと、第二に次々に出てくる煩惱を極力少なくすること、第三に努力して仏法を学ぶこと、第四に精一杯に心を砕いて生死を離れること、この四つのことを誓うこととて、すべての菩薩が起す誓願であります。

悪業の者も救われるなら、いくらでも悪事を働いてよいということではありません。心が散乱している時のお念仏も、同じく救われるなら、お念仏は形だけでよいということではありません。学僧で有名な明遍僧都との問答で、よく知られている御法語があります。

「念仏は申候へども、心のちるをばいかをし候べき。上人答ていはく、それは源空もちからをよび候はず」

の木の蔭に タリパー

純良藤佐

(正大学講師)

インドのあの町この村
(2)

インド各地を歩いていると、外国のナンパ
ーのついた自動車にしばしば出合います。イ
ンド亜大陸は、ヨーロッパ大陸と陸続きであ
ることを百も承知でいながら、実際ヨーロッ
パから走ってきたこれらの車を見ると、それ
が実感としてハッと感じられることが何度も
ありました。航空機を別として、今日でもヨ
ーロッパからインドへの道は容易ではありません。
せん。快適なドライブを楽しめる黒海の岸辺
から、雪のザクロス山脈を超え、古来数えき

れぬ人々によってふみかためられたカイパー
ル・パスを通り、インダス河を渉ってガンジ
ス河の平原に到着するまでには、いくつかの
スリルに富んだ冒険をへたり、難関を突破せ
ねばなりません。海路にしても猛暑の紅海、
アラビア海には苦勞します。

しかし、アーリア人の侵入を始めとして、
人々はいつの時代にも山を越え、海を渡って
やって来ました。西歴前四世紀、アレキサン
ダー東征の前後、多くのヨーロッパ人がイン
ドを訪れています。セレウコス、ニカトール
によってマウルや王朝のチャンドラグプタの
宮廷に外交使節として送られた、メガステー
ネスもその中の一人でした。彼の書いたイン
ド誌の原本は失われていますが、かなり多く
の断片が他の地理学者などの著述に引用され
て残っています。古代インドの人々は、歴史
を文字に残していません。そこで我々が古代
インドの町や村のありさまを知るのには、外
国の資料に現われたインド、文学作品、考古
学的発掘の結果と云ったものによる他はない
ので、このメガステーネスの記述は大変に貴
重なものと云えます。

彼は先ずインド全体についてこう云いま
す。「インドは豊かな国で作物は年に二回収
穫され、水は豊かで多くの果物を産する、野
や山には多種多様な動物や鳥が住んでいる。
人々は強健で、軍隊は整備され、戦いは大変
に強い」。彼の使したマウルや王朝は、当時
北インドで最強を誇る国でありましたから、
彼の云う通りこの頃の北・中インドは、豊か
な所であったでしょう。今日でもガンジス
河の流域は豊かな水に恵まれてはいますが収
穫は年に一回、森や林などと云うものも、マ
ンゴー園以外には見当りません。皮肉なこと
に、パトナを首都とするビハール州は、一
部、炭田やダム計画も行われていますが、チ
ョータ・ナグプールと云う未開地域を持ち、
夏の六月にはキラキラ光る太陽が、乾いた晶
や、ゴソゴソした岩山にはねっ返っているだ
けで、ききんもめずらしくない所です。
さて、パトリプトラの町について彼は次
の様に記しています。

「ガンジス河の平均の深さは二〇フアトム
ス(約三六メートル)、河巾は一〇〇スタジ
ア(約二〇キロ)である。この河と他の河と

の合流点にバリボトラ（バークリブトラ）は
位し、縦八〇スタジア（約十六キロ）、横一
五スタジア（約三キロ）である。町は平行四
辺形をしており、木の壁によって囲まれ、矢
を射るための穴があいている。防禦と下水兼
用のミゾが掘られ、壁には五七〇の塔があ
り、六四の門が開いている。ここに住む人々
はインドの中で最も秀でており、ブランイと
呼ばれ、その王はサンドラコトス（チャン
ドラグプタ）の様にバリボトロスの姓を持
つ。」

マウルヤ王朝の首都として西方へは国境ま
で幹線道路が整備され、東へはガンジス河を
下って海に通じる要衝にあるこの土地は、政
治、経済の中心として栄えていたわけだ。
町が木の壁で囲まれていたと云うのは一寸、
変わっています。カシミールを除いてほとんど
地震のないこの国で、土木建築材料は、土か
サンドライ・ブリック（自然乾燥の焼かない
レンガ）か、石、レンガを用いますが、ここ
では防壁や下水溝に木を使っており、現にそ
れらが発掘されています。ギリシャ語の他の
記録には、「河に面した町の壁は木で作られ

る。それは洪水によって町がしばしば破壊さ
れるから」と云っていますが、ガンジス河沿
岸の他の大都市、コーサンビやカーシーから
は木壁のあとが発見されていないので、やは
りこの町に特有のものであったと云えます。
実際の町の中がどんなであったかは記録にあ
りませんが、今日、シテイと呼ばれる曲りく
ねった小路を歩いてみるとこんなものであつ
たろうかと想像が付きまします。

舗装されてはいるが乾けばホコリがいつば
い、ぬれればじめじめした道、両側には二
階、三階建ての小さな窓をもった家、路上に
は馬車、牛車、手押し車などありとあらゆる
種類の車がゆきかいし、道一杯にねそべる
牛、とびまわる犬や猫、頭に大きな荷物をの
せた男、脇腹に子供をかかえた母親、水をあ
びながらはね廻る子供たち、鼻に髪に耳にか
ざりをつけ、腕輪、足輪をならしながら通る
原色のサリーの娘たち、そして何と云うこと
のない呼び声、騒音、強烈な香料のにおい、
大きなひじかけにゆったりと坐り、フツカ
（水タバコ）をふかす貴金屬屋の主人、小ピ
ンを十本ばかり並べて買手をまつ道ばたの商

人、大きなかざりのついたターバンをまき、
長いコン棒をもってバトロールする巡査、こ
んなものが雑然と入りまじって終日、インド
的なメロデーをかなでていると云った具合
です。

一般庶民のこのような生活にくらべて、王族
貴族たちの生活は、この時代の文学作品など
によく画れています。ナーガリカ（町の上流
の人々は）広い邸宅に住み、やわらかい布を
身につけ、何十種かの香料入りの食事をし、
歌や舞にパーティに日々をすごしていました
こうしてバークリブトラの町は、オトギ話
の世界をぬけ出して、我々にはつきりとその
姿を現わしてくるのです。



デメークの塔、初転法輪の地

赤い三輪車



クリーム色の車体の上りのデゼルカーが駅のホームへ入って来た。

「じいちゃん、まだ下りの汽車は来ないね」

少々退屈そうに圭三は祖父にじれったそうに言った。

「うん、この電車が次ぎの駅ですれちがって来る。もうすぐだ」

祖父も、もう一時間も駅の柵に持たれて待ち乍ら退屈そうだったが一分間の停車時間を過ぎてけたたましい警笛を鳴らし乎ら静かにホームを離れたデゼルカーに目を追いつつ、ほっとしたように言った。

もうすっかり太陽も西の森陰に没して、どうやらたそがれがせまっている。西の空が夕日の反射で絵のようにきれいだ。黒い鳥が一羽、羽根をひらりひらりと真っ赤な空を飛んで居た。今日はお盆の十六日簀入りだ。圭三はこの日

を幼さない心にも二ヶ月前より待った。

兄の新一が大阪から帰省する日だ。

この間大阪の新一からお母さんに便りがとどいた時、弟の圭三に赤い三輪車を買って来ると約束した。母からその嬉しい話を聞いてから今迄圭三の心にはひとときも赤い三輪車の事が離れなかった。

煙草屋の正一も酒屋の和男も赤い三輪車を持って居た。

おみやの子供の遊場で気持良さそうに乗り廻す正一や和男の姿を何時もぼんやり眺め乍ら圭三は、

「僕もほしいなあ」

と思った。

「ねー母ちゃん、圭ちゃんも赤い三輪車買って」

とねだって見るが、

「うん、高いよ、父ちゃんがうるさいからね」

と何時も返事は同じ、一年振りに兄が帰るのも嬉しいが、赤い三輪車はもっともっと嬉しかった。

駅の電燈が灯った。ボタンと駅員さんが線路の渡り場の鉄の板を下ろした。

「圭三、汽車がはいるぞ」

祖父も急に勢いづいたように圭三に言った。

「うん」

ホームの垣の柵に足をかけると小さい体を伸び上げるようにしてホームを見た。ゴットンゴットン真黒の汽車が入って来た。汽車が止ると、どやどやと夕暮のホームに人が降りる。圭三はすぐ兄を見止めた。

新一はにこにこ顔をくしゃくしゃにさせ乍ら大きなスリツケースと赤い三輪車を下げている。

新しいピカピカの三輪車にはところどころ包装して有った。祖父も新一に、

「おうおう」

と嬉しそうに笑った。圭三には赤い三輪車を持った新一の姿が何だか偉い人に見えた。

改札口を出る新一に祖父も圭三も、

「つかれたろ」

と言った。

「圭ちゃん、三輪車持っていく」

と手に取らうとすると新一は、

「いや、圭三には持てんぞ」

と言いつつ祖父に渡した。

街すじにはいるまでの駅前長い道を圭三は得意だっ

た。

「兄ちゃん今日ね、母ちゃんおはぎ作っとる」と嬉しくてたまらないんだと言うように両手と体をビヨンビヨン動かし乍ら新一に告げる。

「そうか」

新一も顔を紅潮させ乍らこれも嬉しそうだった。

「せいからね、にわとりもつぶしたよ」

これでもか、これでもかと押しつけるように告げる。ひとつひとつ頭をこくりさせ乍ら旅のつかれも忘れたように知らず知らず新一の足もいそぐ。

△明日お宮の広場でうんと乗ったるぞ▽

と圭三の胸はわくわくするようだった。

正一も和男も目をくるくるさせ乍ら、圭三のピカピカの三輪車を見るだろうと思うともうたまらないようだった。

もうすっかり街の家並みも明るい電燈が灯って居た。

圭三は右の手を新一に左の手を祖父の右手にゆだねるとブランブランをやり始めた。

★

★

近代高僧伝

祥道琳瑞

大橋俊雄

最上の流れが奥羽の山々の谷あいにつくる
沖積地、出羽国村山郡谷地に房藏が細谷与左
衛門守福の六男として呱呱の声をあげたのは
文政十三年十月のことであった。「谷地」の
名が示めすように奥羽山脈が東につらなり、
西に月山、南に朝日の山系をながめる村山盆
地は、恰かも谷底のような感じのする地に居
をしめる静かな農村で、曾って最上川の舟運
によって栄えた町でもあった。細谷家も「一
八」といった素封家で、最上川を上下して
「酒田あきない」をしていた。房藏は七歳の
とき、父母の膝下をはなれて姉のといいでい
る天童老の森の西沢忠右衛門の家から星野有
山の家塾に通っていたが、十六歳の時父を失
ってしまった。早くから故郷をはなれていた
ためか、両親に対する孝情はきはめた厚いも

のがあった。頼みとした父を失った房藏の歎
きはひとかたではなく、一時は茫然自失。な
すところを知らぬという有様であったが、漸
く心をとりもどしたあけく、「いやしくも男
子と生れて何をすることもせず年月を送る
ならば、犬や馬と何ら選ぶところはない。犬
死だけはしたくない。しかし何とか男子とし
ての面目を立てたいものだ。一そうのこと商
売に精だして一攫千金を夢み、一時の豪奢を
きわめようか」と考え、或時はまた「いや名
利のあるところに災福をとまなうというのが
世の常というではないか。それならば名利を
すてて僧となり、なき父の冥福を祈り、我身
の修道につとめた方がよいかも知れない」と
いうことで、遂にはたまたま天童久野本の常
安寺に桑折無能寺の琳堂が来錫したのが縁と

なって、弘化三年三月出家することになり、
剃髪して名を琳瑞と改めた。以来彼は無能寺
で専心持戒堅固に精進をつづけることになっ
た。

無能寺は浄土律を奉ずる律院で、修業は教
院にくらべて一層きびしかった。その律院生
活を孜孜としてうむことなく、師の琳堂や法
弟光忍や良慶をはじめ数多の律僧たちと修業
にこれつとめていたが、世相はどちらかとい
えば戒律地におち、名利にのみあけくれする
僧が多かった。そのため福田行誠は何とか僧
侶の品性を高め、惰眠を覚醒しなければ世
人の批判をこうむること厳しく、仏法を興隆
させることはできない。それには先づ戒律の
厳持こそ急務であることを痛感し、江戸に律
院を建てて、人材の養成につとめることを急
願した。その時律僧指導の和上として白羽の
矢がむけられたのが琳堂であり、琳堂に推さ
れて行誠のもとにおくられたのが前途有為の
青年律僧琳瑞であった。彼によって伝通院の
山内に処静律院が建立されたのは安政四年四
月のことであったが、出府後彼は行試につい
て仏学を究める傍ら、東条一堂に師事して儒

学を修め、時には上野寛永寺の懸澄の門を叩いて律学を学びもした。琳瑯にとって浄土律の宣布と修法の場を江戸にきつき、僧侶の模範となるべき律僧を養成して、宗門の指導者たらしめたいというのが念願ではあったが、それにもまして気にかかるのは尊王攘夷の問題が世をあげて論じられ、去就にまよい、人心が動揺していることであつた。

じつとして律院で修業するには、それは師行誠の切なる望みがあるとはいへ、心は許さなかつた。何とかして混乱している世相を救いたい。律僧の養成はそれからでも出来るが、世の混乱

は一刻も猶予できない。これも立派な律僧のとるべき道ではないかと考え、高橋泥舟・山岡鉄舟・清川八郎とも交わり、又水戸派の黒川嘉平・鈴木佐平・伏見亦次郎とも交遊を重ね、松平春嶽や井伊直弼の屋敷を訪ねたこともあった。松平や井伊を除く人たちは時折処静院を訪ねたけれども、彼等は律院の生活にいそむ徳者としての琳瑯の人格にひかれた篤信者でもあったらしい。山岡は和上から

仏法を聞いて剣法が益々上達したと彼自から語っているし、金子亭三郎も薩摩藩の邸内でおれたとき、左腕の奥に和上からもらった珠数をはめていたという。和上に接した人達



人 上 瑞 琳

の中には、佐幕派の人もいれば攘夷派の人もおったし、幕府要路の人たちもおった。これらの人達に接して思想の一致点を冷静な態度で求めたい。若し求めることができなかったら、国を挙げて世相を正道にもどすために努力すべきだ。そのためには広く多くの人たちに接し意見を聞かなければならないというのが、和上の考えであり、和上はどちらかといえど公武合体論者であつた。

かくて慶応三年十月十八日のこと、和上は高橋泥舟の邸を訪つて、議論を交わしたが、両者の意見は対立したまま、日はとつぷりと暮れ深更に及んでしまったため、又の日を期して別れた。網代笠をかぶり、白の綿入れを身にまとい、草茶色の袈裟をかけ念仏をとなえつつ、泥舟のつかはした斎藤安之進という青年を供にして帰院の途中、三百間坂にさしかかったとき、突如おどり出た二人の刺客のため、右の鬢から肩先にかけて切りつけられた七寸ほどの傷がもとでたおれてしまった。和上は最後まで念仏をとえ、手は胸にあてて合掌し、念仏者としての態度を堅持していた。さすがは律僧であつた。これより先き和上は文久三年大般若経の刊行を発願し、辛苦を重ねること三年慶応二年にはその業を成就したが、和上のなくなった四日前の十月十四日には、將軍徳川慶喜が大政を奉還したことを思うにつけ、今少し時をまっていたら悲業にたおれることもなく、律院の興隆もなしとげられたであろうことを考えずにはいられない。時に世寿三十八、法名を祥道琳瑯大和上という。

聖道はあり得るか

村

瀬

秀

雄

(天正大学幹事)



もろこしわが朝に

もろもろの智者達のさたし申さるる

観念の念にもあらず

また学問をして念の心をさとりて

申す念仏にもあらず

一、他力の念仏

法然上人が開かれた浄土宗の信仰は、深遠な学問をきわめた結果初めて判るといふものでもなければ、難しい修行を積み重ねた後に初めて体得されるというものでありません。長い仏教の歴史を續いてきて、法然上人のご信仰の段にくると、突如大平原に出たような一大光明を感じます。どちらかといえば哲学的思索を重んじてきた仏教の流の中にあつて、一切の智慧を超えて、一つの信仰に昇華したように思われます。しかも罪深い人が必ず救われるというのですから、仏教における革命といつてもよいと思います。それなら法然上人の念仏はどのようなものか、これを一言を以て申すことができます。

「南無阿弥陀仏というは、別したる事には思ふべからず。阿弥陀ほとけ我をたすけ給へといふことばと心得て、心には阿弥陀ほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿弥陀仏と唱るを、三心具足の名号と申なり」(勸修御伝第二十一)

このお訓は折にふれて申されていたのですが、この口称念仏がどうして仏教界の革命とまでいわれたのか、法然上人の選択がどうしてそれ程に貴いことだったのか、それにはまず当時行われていた念仏がどのようなものであったかを知らね

ばなりません。

ここで上掲の一句について簡単な註を加えますと、もしは諸越と書き、中国のことです。智者といふのは學者に対する敬称です。昔、天台大師が智徳兼備の高僧であつたので、隨の煬帝が大師を賞讃して智者と呼んだのもその一例です。次に沙汰といふのは、物ごとを選別し悪いものを捨て、好いものをとるといふ意味ですから、是非を論じつゝした教義ということです。るは敬語です。観念の念とは観念の念仏のことです。依つてこの句を繰り返し申せば

法然上人の唱える念仏は「中国や日本において、多くの學者たちが唱えられている観念の念仏ではありません。また学問を基礎としてその上に成り上つてゐる念仏でもありません」ということになります。

法然上人は仏教を自力聖道門と他力浄土門との二つに区分されましたが、念仏に対しても同じように自力の念仏と他力の念仏とに区分されました。自力の念仏は個人的修養という点では結構ですが、往生を願う信仰には役立たないとして、これを選んで捨てられました。即ち「凡そ念仏に他力の念仏あり、自力の念仏あり。他力の念仏は往生すべし。自力の念仏は本より往生の志しにて申す念仏にあらざれば、またく往生すべからず」(念仏往生要義抄)

と申されています。しかし自力といい他力といっても、その区別が仲々難しいものです。例えば自分が努力することを自力とし、特別な努力を行わないことを他力であるかのように思うのも、陥り易い誤解です。努力するかしらないかは問題でなく、自分の力量に限度のあることを自覚し、絶対力である阿弥陀さまの本願を信じて疑わぬことが他力ですから、あくまで心の内面的な問題です。この点については次の御詞を拝見すれば、明瞭になることです。

「ただ一念二念を称ふとも、自力の心ならん人は、自力の念仏とすべし、千遍万遍をとなふとも、百日千日夜ひる励みつとむともひとえに願力をたのみ、他力をおふぎたらん人の念仏は、声々念々しかしながら他力の念仏にてあるべし」

(念仏行者訓条)

二、智慧を超える

法然上人は幼少の頃から聰明でした。叔父の観覚が幼い勢至丸のことを、文珠の像と呼んだ話は有名であります。出家なされた翌年十六才の時から天台の勉強を始められ、その後には総ゆる経論について学ばれました。この間において歴大な一切経を五遍も繰り返して読まれたといわれ、広く各宗の教義について通曉するにいたりました。それと同時に参籠され

る等の修行も積まれました。こうして遂に当代随一といわれる大学者となりました。「上人智慧第一のほまれ巷にみち、多聞広学のきこえ世にあまねし。おほよそ我朝にわたれる聖教伝記眼にあてずといふことなし」(勅修御伝第五)

法然上人はこのように勉強し、仏教全般に亘って奥義をきわめられながら、ご自分では少しの満足もされませんでした。それはご自分に対する批判が実に厳しかったからであり、些少の妥協も許されなかったからです。学問を積みながらその上に安住することなく、勉強が進むに従って逆に心の虚な穴が大きくなってゆきました。かかることは仏教においては矛盾でした。しかし学問によって信仰上に満足が得られることになりました。

「かなしきかなかなしきかな、いかがせんいかがせん、ここにわが如きは、すでに戒定慧の三学の器ものにあらず。この三学の外にわが心に相応する法門ありや。わが身にたへたる修行やあると。よろずの智者に求め、もろもろの学者に訪しに、教ゆる人もなく、しめすともがらもなし」(聖光房に示されける御詞)

こうした苦悩は深刻であったと思われます。万策つきた法然上人は、深い悲しみの中に沈み、嘆きながら経蔵に入られました。そしてそこで本願念仏を発見されました。暗夜の光

明とはこのことだと存じます。しかしこの光明を発見できたのは、豊富な学才と深刻な内省があったからであることを思わねばなりません。それだけに一度身につけられた御信念が絶対的なものとなったわけが判ります。不退転のご信仰を得られたということであります。

「仰ぎ願くは、仏のことばをふかく信ぜよ。もし一切の智者百千万人きたりて、

経論の証をひきて、一切の凡夫念仏して往生する事を得ずといはんに、一念の疑退の心を起すべからず。ただ答へていふべし。汝のひくところの経論を信ぜざるにはあらず。汝の信ずるところの経論

は、汝の有縁の教なり。わが信ずるところは、わが有縁の教なり」(要義問答)

百千万人の智者が押寄せてきても、縁なき人には関係なしといわれた御信念は有難いものであります。法然上人は大智者でありながら、ご自分の智慧を超えられました。それだけ



にご自身が智者と呼ばれるのを嫌っていたようです。ある人が「上人の申される念仏は、一声ごとに仏の真心にかなうものだし、念仏の功德を知りつくしているので、上人こそまことの智者である」という意味のことを申し上げました。これは誰もが思う至極ごもっとものことのように聞えますし、又その人も軽い気持ちで敬意を表するため簡単にいったものと思えます。ところがこれを聞いた上人は、案に相違して色を正し、強くこう申されました。

「なんぢ本願を信ずる事まだしかりけり。弥陀如来の本願の名号は、木こり草かり茶つみ水吸みのたぐひ如き者の、内外ともにかけて、一文不通なるが、となふればかならず生れなんと信じて、真実に欣樂して、つねに念仏申すを最上の機とす」

(諸問答)

智者という言葉の中にも、何か自力という感じがあり、眞の信仰と智者とは直接の関係がないという意味をいわれたのでしよう。

三、観念の念仏を排す

法然上人以前の念仏は、どんな念仏であつたかといへば、いろいろの意味を含めて申し、ある目的を達成するための一手段として申していました。その意味と目的とによって内容の違う多くの念仏があつたわけで、大きく分ければ観念の念仏と学解の念仏とになります。更に観念の念仏については口称念仏、観像念仏、観相念仏、実相念仏に分類できます。

この中で観像念仏というのは、画や彫刻の仏像を飾り、その像や教説を心に念じながら申す念仏であります。念仏といっても、心の持ち方に重点があることはもちろんです。こうした念仏に対して、法然上人は強いお訓を以て否定されました。即ち、

「近來の行人、観法をなす事なかれ。仏像を観ずとも、運慶、康慶が造たる仏程だにも、観じあらはすべからず。極楽の莊嚴を観ずとも、桜梅桃李の花菓程も、観じあらはさん事かたかるべし」(常に仰せられける御訓)

運慶と康慶は父子であり、共に名匠を以て名高い仏工です。鎌倉仏師の祖といわれ、多くの作品を遺しています。観像念仏といっても、名工の作品に及ばないではないか。極楽をいかに観じて花一輪の妙に及びもつかないではないかと

申されました。言葉こそ短い、幸らつたお訓と申す外はありません。これを以てしても観像念仏を相手にせず、捨て去られたことは明瞭であります。

次に観相念仏というのは、仏のお顔やみ心を心に思い念じて申す念仏のことです。この念仏についても西国の修行者と交わされた問答一つによって、明かに捨てられたことが判ります。即ちその修行者が法然上人と法談をした後でいしました。「長時間にわたつてお念仏を申していると、どうにも心が散ります。こんなお念仏ではいかに数多く唱えても頼りになりません。それよりは仏さまのお顔や心を心に念じながらお念仏を申せば、心が乱れないからたとえ数が少なくても、この方がよいと思います」この話を普通の人が聞いたなら、その通りだと思つてしょう。しかし上人は言下に否定されました。「源空は全くさは思はず。本願のむなしからず、称念せば必ず生るべしと思より外には、全く心にかくる事なし」(諸人勸化のお訓)

しかし実際問題として、口で念仏を唱えながら頭の中で別の事を思い浮べていることのあるのは事実です。ふと気がついて、これではならぬと熱心に念仏を唱えていると、またしても何時か他の事を考えています。凡人の常とはいへ困ったことです。しかし法然上人はこう申されました。

「先づ名号を唱えよ。名号の徳として妄念自ら止み、願心自ら生ずる也。何に況や本願の元意は、乱心止み難き者を化せんがため也」(決答授手印疑問抄)

仏さまは凡人の心の内をよく御承知なのであります。ここに仏さまの広大な慈悲があるというものです。

また実相念仏というのは、天地自然の中に唯一の真理があることを会得し、念ずる我と念ぜられる仏とが一体であり、仏と我とは不二であることを観ずるものです。これは哲学的な念仏と申すべく、このような難しい念仏を法然上人が捨てられたのも当然であります。この外にも、法華經に説く法華念仏についても捨てられています。このように上人は観念の念仏を選び捨てられました。

ここで問題となるのは、浄土三部經の一つの觀經に、觀仏と念仏とを併せ説いていることです。善導大師の疏において、觀經には觀仏と念仏との二つの所説あることを明かにされています。また觀勝称劣という言葉がある位で、觀仏の方が念仏より勝れていると一般からみられていました。それにも拘らず法然上人は独自の解釈をされています。その要点を申せば「觀仏は殊勝の行であるが、仏の本願でないから、それよりも本願である念仏の方を信仰する」(選択集)ということです。これは全く上人の御信仰であり、一見識でありま

す。この点についてある人が質問して「觀經には色相觀が説かれていますが、称名の行人も、これを觀じないよりは觀じた方がよいと思います。」といいました。その人にしてみれば当然のこととして申したのでしたが、これに対して甚だしく明確なお答えを以てしています。

「源空もはじめは、さるいたづら事をしたりき。いまはしからず」(諸人勸化のお詞)

さるいたづら事とは、そのような無益のこととという意味です。初めは觀經の説によって觀相もしたが、後になって無駄であると知ったので、今はやめているということです。自らの体験によりあくまで本願念仏の一つに選択されたこともまた上人の御信念というより外はありません。

四、聖道はあり得るか

學問を基礎として申す念仏を學解念仏といいます。念仏の意味するところ、その功德や利益等をよく研究して申す念仏です。従ってこのような學問をしないことには、こうした念仏もあり得ないわけです。

學問を以て説得しようとする場合には、その相手となる人も同じ程度の學問を持った人でなければ理解できないので、説得もなし得ないわけです。それと同じく、學的な裏づけを

必要とする念仏は、その学問を理解できる人同士だけに通ずるものであります。いい換えれば、この念仏は知識階級にしか通用しないもので、一般人には縁のないものであります。もう一ついえば、学問の程度によって念仏の内容も異なるわけで、その学問なり理解程度がどこまでゆけば十分なのかという点においても問題があります。

法然上人の信仰の立脚点とは全く違っていました。第一に、仏教は誰でもが救われるものでなくではないというご信念でした。凡夫は凡夫なりに粗末な結果となるようではいけません。凡夫も最上の極楽に往生できるのでなければ、信仰の対象になり得ません。ここに上人の並々ならぬ御苦心があって、新しい信仰が発見され、目的が達成されました。

「われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に、むまるることを、しめさんがためなり」(勸修御伝第六)

凡夫といえども立派に極楽往生ができる浄土宗の教えが確立されました。法然上人は凡夫のと申されていますが、果して凡夫でない者がこの世に幾人いるでしょうか。上人すらも自ら凡夫と自認されたことを以てしても、上人の申される凡夫には深い意味のあることを思わねばなりません。上人はいかに学問を極め徳を積んでも、時々刻々の反省を緩めません

でした。上人は誰よりも真剣な毎日を送られました。ここに痛切なお訓があります。

「かなしきかなや。善心はとしどしに従いて薄くなり、悪心は日日に従いていよいよまさる。されば古人のいへる事あり。煩惱は身にそへる影、さらむとすれどもさらず。菩提は水にうかべる月、とらむとすれどもとられずと」(念仏往生要義抄)

こうした反省のあるところ、誰が我こそ非凡なる者といひ得ましょうか。法然上人は学者であって、しかも智慧を当てにせず、赤裸々の姿になって救いの道を求められました。そしてご自分からまず凡夫の姿に還られました。「もし智慧をもて生死を離るべくば、源空なんぞ聖道門をすてて、この浄土門におもむくべき。まさに知るべし。聖道の修行は智慧をきはめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかへりて、極楽にむまると」(諸問答)

信仰に生きるためには中途半端なことは許されません。知慧を極めるか、又は愚痴に還えるかの二つしか道がないということです。そして法然上人は後の道をとられたのです。今かりに大智者があつて智慧を極めたとしても、それはその一人に限られたことです。同じことを他の多くの人に求めることは無理というものです。大部分の人というよりごく僅か

の人を除いては、聖道門の修行は不可能に近いということになります。それに反して智慧を超えたところに還愚があり、初めて新しい光明の道が開けてゆきます。

「源空は智徳をもて人を化する。なを不足なり。法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども念仏の大先達として、あまねく化導ひろし。我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、念仏勤行の人たらん」(勅修御伝第四十八)

法然上人の智と徳とが不足していたとは誰も信じませんが、ご自身では愚鈍と申されているので、まだまだ智徳が十分でないといわれたのかも知れません。またいかに智を極め徳を高くしても、人を教化するには不十分だという意味にもとれます。一般の人を教化するには智徳ではできないとも解せます。何れにしても自分独りが極楽に往けばよろしいというのではなく、衆生とともに往生するのだという宗教人の面目がうかがわれます。

このようにして法然上人は、一切の念仏を選び捨てられました。靈に新しい種を入れるためには、古い種をすっかり捨てて空にしなければならぬように、一切の念仏は自力の念仏として捨てられました。(以下次号)

お彼岸の施本

仏教の生活

秋特集号／現代つ子に仏の道を・聖徳太子とは・仏教の生活質問帳・俳句・良寛と栗のイガ・心経をたずねて・砂糖と鑑真和尚・生きているよろこび・など信仰生活を願うために作られた明るい施本

◎ 一部十二円・千実費
◎ 見本三十円乞切手

浄土 特集号のお知らせ

十一月号……現代仏教批判
十二月号……阿弥陀信仰論争

東京都文京区湯島三組町13

仏教書肆 中山書房

TEL (831) 8494番

浄土の動き

米寿を迎えた椎尾法主

増上寺の椎尾辨匡法主が米寿を迎え、その祝賀会が学士会館で盛大に行われた。参会者六百人近くで、大広間三つを連ねての祝賀パーティであつた。会館でのこんな盛大な祝賀会もめずらしいことであろう。老法主の人の徳の高さをしのばせた。余りの広さに、主賓の顔も見えないとあつては、参会者もいささか物足りなかつたに違いない。

いろいろな代表者の祝辞の後、赤い頭巾とチャンチャンコをつけた法主は、しわがれた声で、八十八才とも思えぬ元気な声で、タツブリ答辞を述べられた。その中で、特にこんなことを、強調された。

日本に仏教を大いに広めた聖徳太子を、もつと顕彰してほしい。「以和為貴」の精

神を仏教精神にのっとりて宣揚された太子を忘れてはならない。さらに、聖武天皇も、この際大いに顕彰してもらいたい。何と言つても、日本に仏教を宣布した功績者であるからだ。太子は大分顕彰されているが、天皇は、一向その実が知られていない。これらを顕彰することは、仏教徒の責務である。

目は殆んど見えないようであるが、常に目の前の問題を考えつづけておられるこの老法主の希望を、実現して行きたいものだ。

カヌーに強い大正大学

悲喜こもごも

大正大学と言えば、東京にある有名な仏教大学で、浄土、天台、真言（豊山、智山）によつて立てられている。この大学、多くは坊さんの玉子であるが、カヌーというボートの競技が昔から強い。日本では勿論一番であ

る。昨年は、ドイツでの世界大会に日本代として出陣したが、惜しくも敗れた。勿論来年のオリンピックの有力なメダル候補である。

今年も、千葉（浄土宗）東山（真言宗）両君が、日本代表として、ヨーロッパに出かけた。肉体力と精神力のいるカヌーとあれば、仏教大学生の実力が発揮されるに違いない。

ところが、七月二十六日、荒川で練習していた一年生の野島君のカヌーが転覆して水死するという悲劇が起つて、大騒ぎとなつた。泳げなかったのが、運のつきであつたらしい。輝かしい伝統を守ろうと、努力していたに違いないが、気の毒なことである。

無常ということを、ひしひしと感じたでき事であつた。

表紙の解説

木喰上人の地藏菩薩

駒場日本民芸館蔵

「無住より優れた住処はあらぬ。一切を求めんとならば、一物をも求めてはならぬ。捨業にまきける所得はあらぬ。僧は貧を味わう。欲せず有せざる者は一切に自由である。」

この言葉は仏像を刻んだ木喰明満を評した柳宗悦のものである。円空以上に北海道松前から鹿児島まで、廻国遍路の旅を歩み続けた木喰である。その大願はあたかも仏に招かれているかのように、とどまることなくひたすら国々へ巡礼している。真言宗の僧としてとどまっているのでもない。四十年の間独特なユーモラスな仏像を刻みながら、今でも全国で香煙のたえることなき寺々の復興を願っていた。目と口とは微笑みを、円い顔は大どかな仏の境地を、修行と共に深まって作られている木喰仏。ただひとつの行為がすべての行為に連なる仏の行でもある。ほんものの菩薩行の実践者の和歌にその心境を拾おう。

木喰の 唯本願を うそにせば

うその中より 出ル本願

(右上 善応)

編集後記

▼新しい社会の波がどんどん押し寄せてくる。こんな時、われわれは何事によらず無関心であってはならない。創価学会の問題は余りにも大きい。常にわれわれの関心とするため、本誌で特集したが、これだけに終らないで、毎月つづけていきたい。たとえ一頁でも。

▼外ばかりに目をとられて足もとを忘れてならない。宗祖の意のあるところをかみしめつつ、現在の糧としたい。村瀬先生の一枚起請文のお話は、その点で意味深い。

▼本誌八月号「私の念仏生活」中、次の如く訂正させていただきます。

一頁二段横内浄音師
一二頁一段声即現
一四頁二段汝是蓄生

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円
(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円
(送料 不要)

浄土 九月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可

昭和三十八年八月廿五日 印刷

昭和三十八年九月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都千代田区飯田町一ノ廿二
電話東京三三二局五九四四番

横濱東京八二一八七番

浄土トラクト

大正大学教授・文博 佐藤賢順著

再版

信仰へのみちびき

B 六版・十六頁
定価十五円 二十円

目次

- 1、大慈悲の仏教
- 2、知性を超えて
- 3、美的情感を超えて
- 4、本願の不思議にて
- 5、すべてを包む愛
- 6、人生は信ずる心から
- 7、お導びきのまにまに

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の葉

目次

- 1、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 2、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 3、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 4、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 5、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 6、信仰のすがた（つみは十惡五逆のものも）
- 7、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 8、あとがき

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人 鑑仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
一百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

B 六版・十六頁
定価十五円 二十円

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 芸術院賞受賞 香取正彦先生



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田